

# トンビと私と青い空

砂糖 螢 子

鳥などに興味のない子供が、あの日、何故空を見上げていたのか。

おかつぱ頭の幼い私は、その時、澄みきった青空に舞う一羽のトンビを見つめていた。

翼を広げたまま、空高く、悠然と、大空高く円弧を描いていた。

その姿をじっと目で追いながら、ボーッと見惚れていたのだ。

ゆったりとした、長い時間。トンビと青い空、それだけだった。邪魔するものはなんにもない。空の流れも止まっているかのように。

が、この静寂は突然破れた。私のつむじの丁度真ん中に、ビタツと冷たい液体が落ちてきたのだ。ハツと我にかえるとともに、それが鳥のフンであることは、容易に察しがついた。

あの鳥が命中させたのだ。うんと高い空から、私のつむじのどまん中を狙って……。

ウィリアム・テルやキューピットの矢だって敵わない、神わざだ。そもそも飛びながら用を足すなんて、人間にはできっこないのだから。

「なんて、なんて凄いな！ あんなに遠くから」

ハンドルを握ると、ラジオやCDを聴くのが習慣だ。なんとなく、スイッチを入れてしまう。

その日は晴れていて、車の窓を少し開けると、入ってくる風が心地良かった。アクセルを軽く踏みながら、見慣れた景色を眺めていた。珍しくオーディオはつけずに。

「ピー、ヒョロロー」

トンビの声が耳に入った。

見上げると、雑木林の梢あたりに、一羽のトンビが。近頃は、国道沿いの木々もめつきり減って、羽根を休めるのも大変だろう。

それにしても久しぶりだ。この音色を耳にするのは。清々しく、明朗にして伸びやか。青空にとっても良く似合う。快い余韻が、耳に漂った。

「そうか！ これだったんだ」  
「ずっと昔から抱いだいていた謎が、この瞬間、解けたような気がした。

私はすっかり驚き、ほとほと感心してしまった。「鳥は目がいいって誰か言ってたけど本当なんだ！」

そして思ったのだ。「向こうも、私のことをずっと見てたんだ！」「空はあんなに遠いけど、トンビと私は、目と目で確かに見つめ合ってたんだ」と。

なんだか妙に嬉しくて、胸がワクワクした。空に向かって手を振るでもなく、ただ、フワーツと身体から心が離れて、空に舞い上がるような、そんな気分だった。

それ以来、ずっと変わらず、トンビは私にとって、懐かしくも特別の存在なのだ。

地上の獲物目がけ、旋回しながら急降下する動体は、息を飲むほどに、惚れ惚れするほどに見事だ。その一瞬にかける真剣さは、胸に迫るものがある。

所詮人間技の航空ショーなど、失礼ながら足元にも及ばない。

日が落ちて、薄暗くなっていく空に追いかけるように、何処へ飛び去っていく後姿に漂う寂

寥感。狩りの成功と、日々の安息を願わずにはおれなくなる。

そして、「ピー、ヒョロロ」と、天から降り注ぐその音色は、声であり、言葉であり、人間の創作した、どんな楽曲にも勝る音楽なのだ。決して絶やしてはならない、と私は思う。

時が過ぎて、地上の緑はコンクリートの隅に追いやられ、川の流れも痩せてしまった。

空も様変わりしている。かつて私の見た空は、トンビのものであった。ゆったりと羽根を広げ、実に伸びやかに、風に乗って飛んでいた。

それが今では、黒いカラスがいつも傍で羽根をバタつかせ、煩わしそうに見える。

電線にじっと止まっているのがトンビであると気づいた時は、ショックだった。体を休め身を守る、保護色の雑木林が激減しているのだ。

トンビのストレスは人間以上かもしれない。生き抜くのに、大変なのに。そう思うと、とても辛い。

ハンドルを握りながら、私はいつも、トンビを励ましている。二つの目で空を見上げながら、時

には、声に出して呼びかけることもある。

「頑張つて！ 私は味方だよ」「ずっとずーっと、応援しているからね！」と。

トンビは、何も知らない。

## 乙女心

砂糖 螢 子

常のごとく、師走と雪が今年もやって来た。新聞やTV各局は、特番やら十大ニュースやら似たような映像、解説を繰り返している。

中でも耳に新しいのが、「ゲリラ豪雨」そして「爆弾低気圧」である。ちよつとばかり、物騒とも受け取れるのだけど。

「表現の自由」やら「営業の自由」のいびつな膨張の副産物が、不健全図書や児童ポルノであるとまでは思っていないけど、気象用語の表現自体が飽和状態で、提供する側も飽きがきているからと

いって、さりげなくミリタリーふうの表現にかじを切って風向きを見てるんだったら、ちよつと節操がない。そんなこと感じる私って、「異常気性」いじょうきしょうと言われるのかしら？

でも、気象用語って一斉に報じられるけど、命名の過程ってどうなっているんだろう？ 商標とも違うし……。天気予報やニュース報道は、もはや日常生活から切り離せない。でも良くわからないことだらけだ。

「異常気性」ついでにもう一つ。新聞の片隅に「六十五歳はねられ死亡」との小見出し。

子供の頃「老婆ひかれて死ぬ」の文字を見て、「何んてヒドイ！」と感じたのを思い出す。今でもちよつとも変っていない、字数の制約とかあるにせよ、「〇〇で死亡事故、被害者は〇歳の女性」とかなんとかならないのかしら？ などと憤慨しつつも、今年の締めくくりに、何かハッピーな出来事はななものかと、期待してしまうのが凡人たる所以である。

願いは叶うものなのか、私に予知能力が備わっ

ているのか。いや全くの偶然には違いない。

しかし、それから程なく、私の目はTVの画面に釘づけになった。

日本人三名がノーベル賞の物理学賞を受賞。なんて素晴らしい！ 誇らしくて、嬉しくて。

日本って凄い！ 受賞者三人三様のコメントも味わい深く、おもしろい。果てしない努力の積み重ねがあつての、晴れ晴れとした笑顔。

けどスピーチって難しい。緊張すると表情が強張って、間がとれなくなる。入念な準備があつても。でも、日本人としては、そういった面もまた好ましく感じられるのだ。

とは言え正直、物理学は余りに縁遠い。LEDの真価などわからず、ただ恩恵にのみあずかっている身である。

何を隠そう、私の脳が大いに高揚したのは、スウェーデン王室列席の授賞式と晩餐会、それなのである。

国王カール・グスタフの端正な顔立ちや立ち振る舞いの見事さ。ゲストへの心配りと余裕。エスコートのスマートさ。

そしてシルビア王妃の、きらびやかにして優雅、

高貴にして親しみのこもった笑顔。年齢を超越した美しさに、感嘆するのみである。最高級のテイアラやドレス、宝飾品の数々が、外観のみならず、内面の美しさも引き立てているかのようだ。豪華な調度品の数々に囲まれている姿は、映画より絵画より感動的だ。女性として、羨望というより、ただただ、憧れと尊敬の念を抱いてしまう。

それだけでなく、三人のお子様方それぞれが美男美女。超美形ときている。

この世の知性とロイヤルな美しさが一堂に会し、祝福ムードを盛り上げて、ノーベル賞とスウェーデン王室のタッグって、世界最強、と思えてならない。

王室については、歴史が浅いとか、血統がどうのというむきもあるし、今までのスキャンダルを取り上げる情報もけっこうある。でもそんなこと世の常。歴史は繰り返すに決まっている。

それでも王族としての努めを立派に果たしてるんだからいいじゃない。美形の子孫を残すことが役割の一つとまでは言えないけれど、庶民より秀でていることは、大いに重要ではないかしら。舞踏会では中心で踊るんだし。TV中継で様子が見

られないのがとても残念だけど。乙女チックな少女の如く、すっかり憧れモードの自分にあきれかえってしまう。今までちっとも興味がなかったのに。節操がないのは私の方かも。摩訶不思議……。

晩餐会へ出席できるのは、受賞者とその家族、職場関係者や友人など、けっこう幅広いようだ。ノーベル賞を受賞しそうな人と、お友達になっておこなきゃ、と荒唐無稽な想像を楽しむ自分にあきれかえってしまう。

気象に話を戻すが、今年の自然災害は、想定をはるかに超えていた。中でも御嶽山の噴火は記憶に新しい、まさか、誰が想像し得たろう。

例えるのは誠に不謹慎ではあるが、私の内に深く眠っていた「乙女心」も、突然噴火した模様だ。

「異常気性」とともに。

それも全て、日本人三名のノーベル賞受賞者の方々のおかげともいえるのだ。

年の瀬に、楽しい夢をありがとう。